慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	元好問の國史院辭職： 併せて「飲酒」五首、「後飲酒」五首と陶淵明について
Sub Title	
Author	髙橋, 幸吉(Takahashi, Kokichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.3 (2010.) ,p.39- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20100331-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元好問の國史院辭職

――併せて「飲酒」五首、「後飲酒」五首と陶淵明について――

髙橋幸吉

一．はじめに

元好問（一一九〇～一二五七）の經歴の中で、權國史院編修の官位に就いた前後は、蹉跌の時期であるといえるだろう。金末元初の戰亂期を生きた彼の人生には平穏な時期が少なく、全てが波瀾に滿ちた生涯であったと言っても良い。だがこの時期は、戰火の中を逃げ回るような生命の危險がない代わりに、惠まれた環境の中での、士大夫としての不遇期であった。いわば安定した王朝期に生きた傳統士大夫と同樣の惱み――科擧落第や官途の不遇――と向き合っていた。ようやく奉職した國史院（王朝の歴史編纂をつかさどり、金では翰林院の附屬機關のような位置にあった）の職を僅か一年で辭職し、居を構えていた登封に歸ったことは、その經歴における疑問點の一つである。

本稿では國史院辭職の背景を整理しながら、その直後に作られた「飲酒」五首、ならびに「後飲酒」五首を檢討する。當然ながらこの詩題は陶淵明「飲酒」二十首に倣うものであり、陶詩と同様に五言古詩を用いた連作で、詩中には陶詩を踏まえた詩句が散見する。これらの詩が作られた背景と關連付けながら、前稿「金代における陶淵明の受容」（『中國研究』第二號、二〇〇九年）の延長線上にある問題意識として、元好問における陶淵明詩の位置づけを考察したい。

二．元好問の國史院辭職の背景

官位に就くまでの元好問の經歷は、順調とは言い難い。二十歲から三度連續して省試まで進むも落第している。特に二十八歲時の落第は、當時文壇で中心人物の一人として重きを成していた趙秉文の激賞を受けた後だけに、かなりのショックを受けていた。このときの落膽は非常に大きく、モンゴルによる兵亂を避けて疎開した嵩山で半ば隱遁生活を送る。落第後は常に詩文にその落膽を述べているが、今回ばかりは仕官の途を諦めようとも考えたようである。そして三十二歲でようやく及第する。だがその後は任官されず、三十五歲で博學宏詞科を受驗。同年の夏に權國史院編修に任官され、ようやく官吏としてのキャリアを歩み始めた。

だが元好問は僅か一年ほどでこの職を辭してしまう。最初の省試受驗から實に十五年の歲月を費やしてようやく叶った仕官を、これほどまでの短期間で辭職してしまったことは意外であり、研究者の興味を引く問題である。まずはその背景について、先行研究に依りつつ整理しよう。

李峭侖「元好問史院告歸原因之推斷[1]」はその原因について、次の三點を可能性として指摘している。第一に「金

谷怨」詩、第二に楊奐との關係、第三に『宣宗實錄』中の衞紹王についての記述、である。現在元好問の年譜として最も完備している狄寶心氏の『元好問年譜新編』（中國文聯出版社、二〇〇〇年版）も、李氏の説に從っている。以下、その三點を再檢討しつつ、辭職の背景を探ってみたい。

第一點の「金谷怨」詩は、元好問が國史院の書寫であった李汾と唱和した作である。劉祁『歸潛志』に次のように言う。

元好問（字、裕之）と李汾（字、長源）は同鄉で、二人とも詩名があった。そのため互いに讓らず、とても仲が良くなかった。……元がかつて權國史院編修官であった時、末帝（哀宗）が故駙馬都尉の僕散阿海の娘を後宮に召し出したが、突然その罪を言う人がおり、後宮から追放された。元はこれに因んで「金谷怨」という樂府詩を作り、李はこれを見て「金谷の佳人に代はりて答ふ」という一篇を作って拒絶した。一時士大夫たちは笑い話としてこれを傳えた。

元裕之、李長源同鄉里、各有詩名。由其不相下、頗不相咸。……元嘗權國史院編修官時、末帝召故駙馬都尉僕散阿海女子入宮、俄以人言其罪、又蒙放出。元因賦「金谷怨」樂府詩、李見之、作「代金谷佳人答」一篇以拒焉、一時士人傳以爲笑談。(2)

本詩は「芳華怨」、「後芳華怨」という詩題で文集に收められている。劉祁は元好問と李汾が「頗る相ひ咸（やはら）らがず」と述べるが、これは事實では無かろう。二人は仕官前から面識があり、元好問は『中州集』で最も親しい友人「三知己」の一人として、李汾に別格の位置づけを與えている。劉祁は元好問より十三歲年少で當時はまだ出仕し

ておらず、引用箇所は父からの傳聞である。この話をした父劉從益は當時の文人たちと廣く交遊があったが、地方官を歴任しており、翰林應奉に轉任してわずか一ヶ月で死去している。[3] 恐らく元好問との面識は、前任地の葉縣で一度會った他は翰林院での一ヶ月に過ぎず、[4] 彼らの交友關係を正確には知らなかったのであろう。

入内してすぐに追い出された女性を詠った詩が、翰林院など比較的政權の中樞に近いところにいた人々の話題になったということは、官僚としての立場に有利に働くとは考えがたい。彼が國史院を追われる一因として、可能性はある。

第二點の楊奐との關係とは、當時「萬言の策」を書いて時勢を批判した楊奐は元好問と親しかったため、元好問がその關連で批判ないし冷遇されたという説である。『元史』楊奐傳にはこの事件について簡單な記述がある。

> 金朝末年に進士に推薦されたが、合格しなかった。そこで一萬言に及ぶ策を作り、當時の問題點を指摘した。内容はみな人が敢えて言わないものであり、まだ上表しないうちに鄉里に歸った。
>
> 金末舉進士、不中。乃作萬言策、指陳時病。皆人所不敢言者、未及上而歸。
>
> 『元史』卷一五三、楊奐列傳

また元好問自身は彼の神道碑を書いて「爲政者に與する者から阻まれた（保爲當國者所沮）[5]」と述べ、爲政者に上奏しようとしたが、止められた上に罪を得たという。これは結局朝廷や高級官僚の元に届かなかった提言であり、當時どれだけ反響があったのか疑わしい。『金史』や『歸潛志』にはこの事件は見えず、『元史』でも楊奐列傳のみに見える記述である。また元好問と楊奐との交遊は確かに親密でしばしば行き來をしたが、それは後年の事であり、

科擧及第前に頻繁な交流があったことを裏付ける文章はない。資料や年譜などではいつ頃兩者が知り合ったのか、その詳細な時期は分からない。狄寶心氏は元好問による神道碑を論拠に、興定五年（一二二一）の省試の際に知り合ったのではないかと推定している。いずれにせよ仕官以前の元好問が楊奐と親密に交遊していたという確實な資料はなく、その交遊が頻繁であると確認出來るのは金朝滅亡前後からである。

楊奐の建言の影響力、及び兩者の交友關係を示す資料を見る限りでは、元好問の辭任の原因になりうる可能性は小さい。李氏は「楊煥然（引用者注、煥然は楊奐の字）の上書という行爲は恐らく元好問の支持を得ていたであろうし、上書の内容もはっきり知っていたであろう。あるいはまた彼の意見を取り入れていたかも知れない」と述べるが、これは論拠となる資料がなく、また元好問の活躍を過大評價している感がある。

第三點の衞紹王の記述に關する問題とは、元好問が出仕していたときに國史院で編纂されていた『宣宗實錄』において、衞紹王を暗君と記述するか否か、という問題である。衞紹王を弑殺した胡沙虎は宣宗を擁立した人物でもあったため、朝臣の中にはこれを支持する者がいた。さらにはその卽位の經緯から、衞紹王から宣宗にかけての時期については言及を避ける風潮が當時旣にあり、資料も少なかった。そこで當時の參知政事であった賈益謙の元に元好問を使わした。

哀宗が卽位すると、史官は『宣宗實錄』が衞紹王に言及することを申し上げた。初め逆賊胡沙虎が〔衞紹王を〕弑逆し、そして宣宗を擁立した〔と記述した〕。宣宗朝の人は甚だしくも、「衞紹王は行うべき道を失い、天命がこれを絶ったのであり、胡沙虎は實に無罪で、さらには主上を推戴した功績がある」とまで言った。獨り尚書左丞張中孚が、「逆賊胡沙虎は大逆不道であるから、劉宋の文帝が傅亮・謝晦を誅殺した故事を用いる

べきだ」と言ったが、その上表文は容れられなかった。

その後朝廷全體で大安・崇慶年間の事柄はタブーとなった。こうなって、朝議では公（賈益謙）が大安年間の參知政事であり、衞紹王の事をよく知っているだろうということになり、そこで編修官〔だった私〕を一人派遣して彼を訪問させた。公はその旨を知ると、私にこう仰った。「私はこう聞いている。海陵王が弑殺されて、〔その直後の時代の〕大定年間の約三十年の間、翰林院などの文臣で海陵王の隱れた罪を暴く者がよい官位を得た。史官たちはこのため海陵王が姦淫殘虐で狂暴であると誣告し、惡名を傳えることきわまりなかった。今これを見ると、百のうち一つでも信じられるだろうか。衞紹王は勤儉で、國家の要人を重用した。その業績を勘案すれば、普通の才能の人間では及ばないものが多い。私が知っているのはこのようなことだけだ。もし私の發言を潤色して〔衞紹王に加擔する者として〕その罪とするならば、私はまたどうして餘命を惜しもうか。」朝廷ではこの發言を優れていると評した。

哀宗卽位、史官乞因『宣宗實錄』遂及衞紹王。初虎賊弑逆、乃立宣宗。宣宗之人至謂衞王失道、天命絶之、虎實無罪、且於主上有推戴之功。獨張左相信甫言、虎賊大逆不道、當用宋文帝誅傅亮・謝晦故事。章奏不報。爾後舉朝以大安・崇慶爲諱。及是、朝議謂公大安中參知政事、宜知衞王事、乃遣編修官一人就訪之。公知其旨、謂某言、「我聞海陵被弑、大定三十年、禁近能暴海陵蟄惡者得美仕、史臣因誣其淫毒驁狠、遺笑*無窮。自今觀之、百可一信耶。衞王勤儉、重惜名器。較其行事、中材不能及者多矣。吾知此而已。設欲飾吾言以實其罪、吾亦何惜餘年。」朝論偉之。

元好問「東平賈氏千秋錄後記」(6)

元好問自身が當時編修官としてどちらの態度を取ったのかは明記していないが、これを契機に賈益謙と親しくなり、詩文を送ったりしている。元好問の爲人からも、皇帝を弑殺した人物を高く評價するとは考え難く、後年の作であるこの文章でも、胡沙虎を一貫して「虎賊」と表記している。恐らくこの時も賈益謙の發言に與したであろう。元好問は衞紹王を暗君とは言い難い旨を國史院に報告したと考えられ、このことが一部の高官の不興を買ったのではないか。元好問の視點では賈益謙のこの發言を「朝論　之を偉とす」と評しているが、當然ながら朝廷の輿論がみな賈益謙を支持した譯ではなく、宣宗朝から仕える者の中には、宣宗擁立の經緯から胡沙虎を支持し續ける者も存在したであろう。特に當時の皇帝哀宗は宣宗の第三子であり、衞紹王を公正に評價することは非常に危險だったのではないかと、李氏は指摘している。

『宣宗實錄』が完成し哀宗に獻上されたのは正大五年（一二二九）十一月であり、哀宗がこの書を目にした時には、元好問はすでに國史院にいなかった。また、編纂途中の狀況が皇帝の耳に届いたのか、正八品の官に過ぎない權國史院編修の發言がどれだけ波紋を呼んだのか。これらの點は分からないが、今上帝の父である先帝の正當性に疑問を呈するとも捉えられかねない發言は、官僚として非常に危險であることは間違いないであろう。

李峭侖氏が指摘した三點のうち、筆者は以上の理由でそのうちの二つには同意する。だがこの他にも、元好問が官界を辭した原因があると考えられる。

三　汴京における元好問

當時の汴京では漢人グループが互いに反目しあう狀況にあった。高橋文治氏が指摘するように、金末は漢人と女

眞人の間で對立が目立たない代わりに、科擧出身者と恩蔭による門閥官僚の對立、進士と胥吏の對立、科擧出身者の中では經義科出身者と詞賦科出身者の對立など、漢人同士が様々な集団に分かれて對立する狀況にあった。[7]

このときの國史院では胥吏の李汾が進士出身者と軋轢を起こし、彼も最終的には國史院を追い出されている。また『宣宗實錄』の文體を巡って王若虛と雷淵の間では諍いがあり、これらを見る限り、國史院内部の人間關係は平穏とは言い難い。諍いと表現したのは、資料を見る限りでは彼らの間に發展的な論争が起こらず、感情的な對立に終始しているからである。高橋氏はこれを單なる文體の好みの問題だけでなく、經義科出身の王と詞賦科出身の雷との黨争であると見ている。[8] このような狀況下で、元好問は國史院に出仕したのである。

元好問は官界ないし中央政府の周辺で趙秉文の門下として、常に黨争に巻き込まれる立場にいた。後年に往事を振り返って次のように述べている。

興定年間のはじめ、私は初めて詩文によって故禮部閑閑公（趙秉文）にお會いした。公は私を教えるに足る者と見なして下さったようで、諸公の間に私のことを言い廣めて下さった。さらに興定五年、公が知貢擧として執り行った科擧に及第した。公はまた私が何かを成し遂げるであろうと仰って、努めて推輓して下さった。そのお褒めが過分なあまり、これを快く思わない者もいた。宰相の師仲安班列中が主導して、公と楊雲翼・雷希顔・李獻能は元氏の黨人であると言ったが、公はこれを氣にしなかった。正大元年、諸公が私を博學宏詞科に推薦して下さった。公は監試官となっていたので、慣例によって試驗會場へは行かなかった。ある日禮部の役所に座っていると、李獻能が外からやって來て、私の「秦王　寶建德を破り王世充を降すの露布」を口ずさんでいた。公は非常に驚いて、座っていた司諫の陳正叔を振り返って「人は私の黨の元子と言うが、本當に彼

と朋黨を結んでいるのか」と言った。公が自信に滿ちていた様はこのようであった。

興定初、某始以詩文見故禮部閑閑公。公若以爲可教、爲延譽諸公間。又五年、乃得以科第出公之門。公又謂當有所成就也、力爲挽之。奬借過稱、旁有不平者。宰相師仲安班列中倡言、謂公與楊禮部之美、雷御史希顔、李内翰欽叔爲元氏黨人、公不之恤也。正大甲申、諸公貢某詞科。公爲監試官、以例不赴院宿。一日、坐禮曹。欽叔從外至、誦某「秦王破竇建德降王世充露布」。公頗爲聳動、顧座客陳司諫正叔言、「人言我黨元子、誠黨之邪。」公之篤于自信蓋如此。

卷三八「趙閑閑眞賛」二首

文中では「元氏の黨」と述べているが、京師に出てきたばかりの元好問を中心に士大夫グループが出來る譯はなく、當時の聲望や地位を考えれば「趙氏の黨」であろう。師の趙秉文を庇ってこのように表現しているに過ぎない。元好問は趙秉文に詩を激賞されてその名が知られ、及第した時の知貢擧も趙秉文であった。そのため趙と對立する人々から見れば、元好問は趙派の新人であり、趙への批判の對象として攻撃される可能性は充分あり得る。科擧及第時には既に派閥の一員と人々に見なされ、宏詞科を受驗した時にはそのイメージが確固たるものになっていた。彼らと親しい李獻能が元好問の文を口ずさんでおり、趙秉文も公然とこれを容認するような發言をしている。元好問への風當たりが強くなるのも自然であろう。趙自身はこの時既に六人の皇帝に仕えた老臣で、致仕を許されずに官に任じられており、いわば文臣として最高位に居る上に、その官を追われることに何の未練もない狀況であった。故に朋黨を結んでいることを指摘されても、痛痒を感じなかった。だがその門下で不安定な身分にいる元好問にとっては、このような狀況が一面で非常に不利であったことは想像に難くない。

さらには元好問が權國史院編修に就いたとき、趙秉文は修國史を兼任しており、楊雲翼と竝んで事實上國史院の最高位に居た。人々の目には趙秉文が元好問を拔擢したように映ったであろうし、また事實としてその通りであった可能性は否定できない。元好問自身が「力(つと)めて爲に之を挽(ひ)く」と回顧したような狀況が、宏詞科及第後もあったとしても不自然ではない。高橋氏は「宣宗崩御にともなって、趙秉文は傘下の人物を翰林に集めた」と見ている。[9] 汴京の士大夫社會において、元好問は常に趙秉文の影響下にあり、官位の低さや門閥の弱さもあって、趙と對立する人々からは最も攻擊されやすい位置にいたと言えるだろう。

このとき國史院にいた人物として資料で確認できるのは趙秉文・楊雲翼・劉從益・王若虛・雷淵・李獻能・李汾などである。趙・楊・雷および李獻能は前述のように趙秉文派と見なされており、元好問と親しかった。劉從益とは以前から面識があり、李獻能・李汾は親友である。王若虛との關係も良く、後年は親しく交際するようになる。國史院の中で樣々な諍いがあったとしても、元好問にとってはみな友人知人であり、詩文について論じ合うなど文學的に充實した環境にあった。[10]

だが逆にこのことが、元好問の立場を微妙なものにしたとも考えられる。人々の間で問題があった場合、どちらか一方に與し難いのである。色々な派閥意識が働いたならば、問題はさらに紛糾する。王・雷の文體問題では、元好問の文學思想からすれば、達意の文を主とする王若虛に與するであろうが、同じ詞賦科出身者とすれば雷淵の同調者と見なされる。個人的な關係から見れば、雷淵は科擧及第前から親しく付き合っている友人でもある。李汾と雷淵・李獻能ら進士との對立はさらに難しい。李獻能と李汾のいずれとも昵懇であり、李汾を擁護すれば、進士出身にもかかわらず胥吏に與していると見なされる。元好問が果たしてどの程度の派閥意識を持っていたのか推測しがたいが、積極的にいずれかの擁護をすることは、新任の編修官として考え難い。結局は全員に氣を配りながら、

彼らの間で板挟みになってしまったのではないか。

結局元好問は汴京において趙秉文の黨人として批判され、その中でも特に趙秉文が推輓している人物として注目され易い存在であった。そして國史院では様々に對立している人々なかで不安定な立場におり、周囲の人間關係に常に氣を配る必要があった。その中で前節で述べた「金谷怨」詩や衞紹王の記述についての問題は、趙秉文一派ないしは元好問を攻撃する絶好の口實になったと考えられる。このような環境の中で、これ以上留まれば自分だけでなく趙秉文の地位が危うくなると感じて辭職したのではないだろうか。事實、元好問が及第した時の科擧では知貢擧であった趙秉文に對する批判が起こり、趙は官を削られている。[11] 元好問の脳裏にはこの事件が思い浮かんだのではないだろうか。

四.「飲酒」五首

苦勞の末にようやく手に入れた官を辭するという人生の轉機に、元好問は陶淵明の詩を踏襲した作品を作っている。「飲酒」五首（卷一）及び「後飲酒」五首（同前）である。この二組の詩は元好問三十六歳（一二二五年）の作で、前年の夏より彼は國史院に奉職し、この歳の夏に辭職して、京師開封から嵩山へ戻っている。詩中で「秋艸深し」と述べており（「飲酒」五首其の一）、本作は辭職から間もない秋に作られたと推測される。「襄城の作」という自注があり、居住していた嵩山登封から、襄城の莊園へと視察に行ったようである。その内容は飲酒を主題としつつ、一方で彼の人生哲理が吐露され、詩中からは官を辭した後の元好問の心境が窺える。

元好問は官僚生活において、周囲との少なからぬ摩擦を感じていたようである。特に「飲酒」五首では奉職中の

心境と、辭職後自らの莊園に戻ってその緊張を解いた心理狀態を描寫している。

西郊一畝宅　西郊 一畝の宅
閉門秋艸深　門を閉ざして秋艸深し
牀頭有新釀　牀頭 新釀有り
意愜成孤斟　意に愜(かな)へば孤斟を成す
擧杯謝明月　杯を擧げて明月に謝(つ)ぐ
蓬蓽肯相臨　蓬蓽 肯(あ)へて相ひ臨むべし
願將萬古色　願はくば萬古の色を將(も)ちて
照我萬古心　我が萬古の心を照らせと

「飲酒」五首 其の一

ここで注意せねばならないのは、彼の心の安らぎは「閉門」や「孤斟」(手酌酒）の中に存在するという點である。つまりはこのとき元好問は、人間關係からの斷絶を望んでいた。永久不變の月を相手に、遙かな過去を思う「萬古の心」を照らせと問いかけている。現在の様々なしがらみを脱して萬古に思いを馳せるという態度は、次の第二首にも共通している。詩句の表現を見ると、この詩からは陶淵明以外の影響も窺える。第三句は蘇軾・蘇轍の詩句が念頭にあると思われる。[12] 第五句は李白「月下獨酌」の「杯を擧げて明月を邀(むか)ふ（擧杯邀明月）」の句を踏襲し、尾聯の「萬古」という語も李白が多用している語である。

去古日已遠　古を去ること日已(ひび)に遠く
百僞無一眞　百僞　一眞無し
獨餘醉鄉地　獨(た)だ醉鄉の地の
中有羲皇淳　中に羲皇の淳有るを餘すのみ
聖敎難爲功　聖敎は功を爲し難く
乃見酒力神　乃ち酒の力の神なるを見(あらは)す
誰能釀滄海　誰か能く滄海を釀して
盡醉區中民　盡く區中の民を醉はしめん

冒頭の二句は「飲酒」其の二十「羲農 我を去ること久しく、世を擧げて眞に復すること少なし（羲農去我久、擧世少復眞）[13]」を下敷きにしたものであるが、彼が自ら經驗した、奉職中の軋轢から發せられた嘆きでもあろう。ようやく官に就いたものの、そこは「百僞 一眞無し」という社會であった。そのため元好問は人々が醇樸で嘘僞りがなかった太古の羲皇の時代に思いを馳せている。だが太古の理想社會から時代が流れ、日に日にその時代は遠くなっていく。現在唯一その醇樸さが殘っているのは「醉鄉の地」、すなわち酒に醉った境地だけである。聖人の敎えはなかなか成果が上がらず、反對に酒の力の素晴らしさが明らかになってきた。苦勞の末に官職に就いても、殆ど良いことはなく、すぐに辭めることになった元好問の境遇が、「聖敎は功を爲し難し」という詩句からも讀み取れる。「誰か大海原を全て釀して酒にし、世の中の人々をみな醉わせることはできないものか」という末句は、氣宇壯大でユーモラスでもある。だが「酒の力の神なる」働きによって「羲皇の淳」へと回歸すべき對象は、自ら

だけでなく「區中の民」であることに注意を要する。「百僞　一眞無」き世の全ての人々を、酒によって太古の醇樸な狀態に戻すことはできないものか、という獨白である。屈原が「衆人皆な醉ひ、我獨り醒む（衆人皆醉、我獨醒）」と述べたのに對し、逆説的な表現で酒の効能を賛美している。

續く第三首は飲酒という主題から完全に外れ、辭職の背景を暗示するような語句が竝ぶ。

利端始萌芽　利端　始めて萌芽し
忽復成禍根　忽ち復た禍根と成る
名虛買實禍　名は虛しくして實禍を買ふ
將相安足論　將相　安（いづく）んぞ論ずるに足らんや
驅驢上邯鄲　驢を驅りて邯鄲に上り
逐兔出東門　兔を逐ひて東門より出づ
離官寸亦樂　官を離るるは寸なるも亦た樂し
里社有拙言　里社　拙言有り

前半四句は辭職の經緯を暗示しつつ、現在の心境を吐露している。「利端」は利益の端緒。ようやく仕官がかなって立身出世の入り口に立った途端、それが禍の元になってしまった。京師の文人の間では「元才子」として有名になったが[14]、ただそれだけで何の成果もなく、逆に災難に遭ってしまった。將軍や大臣になど成るものではない。第五句は典故不詳だが、第六句は『史記』李斯列傳に見える、李斯が刑場に行く際の發言を典故としている。たと

え宰相となってもいつ命を失うかも知れず、出世というのは危險なものだ、ということであろう。第七句については「山西地方のことわざにこう言う（晉俚諺云然）」と自注がある。辭職した直後の詩では、「宦に從ふは堪うる所に非ず、長告　欣（よろこ）びて請ふを得（從宦非所堪、長告欣得請）」（卷一「出鄕」）と述べ、官僚生活からの解放を喜んでいるかのような態度を見せている。それは決して僞りではあるまい。出世の道を外れた落膽と、煩わしい環境から脫出した喜びと、複雜な心境が垣間見える。

第四句では自己の境遇に對する見解を述べる。

萬事有定分　萬事　定分有り
聖智不能移　聖智　移すこと能はず
而於定分中　而して定分の中に於て
亦有不測機　亦た不測の機有り
人生桐葉露　人生は桐葉の露
見日忽已晞　日に見（まみ）うれば忽として已に晞（かわ）く
唯當飲美酒　唯だ當に美酒を飲むべし
儻來非所期　儻來は期する所に非ず

「飲酒」五首　其の四

「定分」は定まった運命。「聖智」は最上の叡智。全ては定まった運命で、どんな叡智をもってもこれを變えるこ

とはできない。だがその運命の中で、予想し得ない機會というものもある。人生は桐の葉の露のように儚いものだから、旨い酒を飲むべきだ。偶然にやって來る富貴榮達は私の期待するものではない。元好問は結局この通り、翌々年には内郷縣令としてまた官に復歸する。ただその背景はよく分からない。趙秉文ないしは友人の推擧によるものか、一族を養うために自身が運動したのか。襄城や陽翟（いずれも現在の河南省）に莊園を保有しており、經濟的にはそれほど困窮していたとは考え難い。必要に迫られてというよりは、仕官して經世濟民に盡くすという士大夫としての願望からであろうか。縣令に就任してから滅亡直前の京師に戻るまでの經歴は資料に齟齬があり、元好問研究の中でも論者によって見解が異なる。

最後の第五首では飲酒という主題に卽して、ここまでの煩悶を突き放したかのような内容になる。

此飲又復醉　此に飲み又た復た醉ひ
此醉更酣適　此に醉ひ更に酣適なり
徘徊雲間月　徘徊す　雲間の月
相對澹以默　相ひ對して澹（しづ）か　以て默す
三更風露下　三更　風露下り
巾袖警微濕　巾袖　微濕を警（いま）しむ
浩歌天壤間　浩歌す　天壤の間
今夕知何夕　今夕　何の夕（ゆうべ）かを知らんや

氣持ちよく醉って月と相對する。「徘徊す 雲間の月」とは自らが醉ってふらふらしているため、雲間の月がゆらゆらと動いている、ということ。これもまた李白「月下獨酌」の「我歌へば 月 徘徊す（我歌月徘徊）」と同様の表現である。ここまで靜かに獨り酒を飲みつつ、辭職という出來事について色々と述懐してきたのであるが、尾聯で一變する。天地の間で高歌放吟し[15]、「この夜がどんな夜か知ったことではない」と全て突き放す。これで元好問は自身の心境に一區切りをつけたかの如く、以後の詩文では辭職を思い惱むような内容が一切現れない。官を辭して數ヶ月、一連の出來事を振り返りつつ、心の整理をした作品と言えるのではないだろうか。

五.「後飲酒」五首

「飲酒」五首から間もなく作ったのが「後飲酒」五首である。こちらは詩題下に「陽翟」と自注がある。陽翟は襄城と同じく登封の南東にあり、襄城と登封のほぼ中間に位置している。翌年春には嵩山に居るので、先に襄城まで足を伸ばし、このあたりの莊園を回って登封に戻ったのだろう。先の「飲酒」から一轉して、本詩では辭職について述べる内容は一切無く、「酒の力の神なる」効能をユーモラスに描寫している。

少日不能觴　少日 觴すること能はず
少許便有餘　少許 便ち餘り有り
比得酒中趣　比（このごろ） 酒中の趣を得
日與杯杓俱　日（ひび） 杯杓と俱にす

一日不自澆　一日　自ら澆がざれば
肝肺如欲枯　肝肺は枯れんと欲するが如し
當其得意時　當に其の得意の時
萬物寄一壺　萬物は一壺に寄す

「後飲酒」其の一

第二句は陶の詩句「身を傾けて一飽を營み、少許便ち餘り有り（傾身營一飽、少許便有餘）」[16]をそのまま用いている。元の詩では「ほんの少し〔酒を求めるくらいの〕生活の餘裕がある」という意味だったものを、「少し飲んだら〔すぐに醉いが回って〕酒が餘る」という意味に換骨奪胎している。若い頃は酒が飲めなくて、ちょっと飲めばもうそれで充分だった、と。以下、酒飲みの心情を描寫していき、「醉いが回って得意の時、萬物はこの酒の壺に宿るのだ」と、いささか大げさにその愉悦を表現する。省略した後半部分では「飢寒」・「貧」など陶詩を連想させる語句を多用しており、「飲酒」五首よりも陶詩との關連性が強く感じられる。

第二首以降も様々な表現で飲酒の働きを詠っている。

金丹換凡骨　金丹　凡骨を換へ
誕幻若無實　誕幻　實無きが若し
如何杯杓間　如何んせん　杯杓の間
乃有此樂國　乃ち此の樂國有り

天生至神物　天は至神の物を生み
與世作酣適　世と酣適を作す

同其の二

仙藥である金丹は凡人の骨を變えて仙人にするそうだが、でたらめでどうやら本物ではないようだ。では酒杯と酒を掬う柄杓の間はどうだろうか。すなわちこの悦樂の國があるのだ。「杯杓」は轉じて飲酒そのものを指すので、もっと單純に「酒を飲むのはどうだろうか」ぐらいの意味かもしれない。そこにある樂國とは、「飲酒」其の二で言う「醉鄕の地」である。天はこの上なく素晴らしいものを生みだし、世の中をゆったりと氣持ちよくする。

ここでは仙藥や仙人と酒とを比べているが、このモチーフは次の第三首にも引き繼がれている。第三首では嵩山から友人がやって來て仙道を學ぶことを勧めるが、これを謝絶して次のように答える。

一笑顧客言　一笑して客を顧みて言ふらく
神仙非所期　神仙は期する所に非ず
山中如有酒　山中に如(も)し酒有らば
吾與爾同歸　吾は爾(なんぢ)と同(とも)に歸らむと

同其の三

神仙には興味がないけれども、嵩山に酒があるならば一緒に行きましょう。「飲んでもいいなら行きましょう」

と答え、盧山に出向いた陶淵明の故事を彷彿とさせる。[17]

最後の第五首では陶淵明の飲酒に對する評價を述べて、この連作の結びとしている。

我愛靖節翁　　我は愛す　靖節翁の
於酒得其天　　酒に於て其の天を得るを
龐通何物人　　龐通は何物の人ぞ
亦復爲陶然　　亦た復た陶然爲(た)り
兼忘物與我　　兼ねて物と我とを忘る
更覺此翁賢　　更に覺ゆ　此の翁の賢なるを

同其の五

「我は愛す　靖節翁の、酒に於て其の天を得るを」という解釋は、彼の師である趙秉文と同じ見地に立つものと見てよいだろう。[18] 陶淵明は醉鄕の地で自らの世界を手に入れているのである。龐通は陶淵明の知人龐通之のこと。江州刺史王弘が陶淵明と知り合うために、酒を持たせて陶のもとへ向かわせたという『宋書』陶潛傳の記述を踏まえる。[19] 醉いが回ってくると龐通之が誰であるかも分からなくなるが、陶然と醉ってそんなことは氣にしない。さらに酩酊した後には物と我との分別さえ忘れ、老莊の齊物論的な境地へと到達する。飲酒を大袈裟に表現した元好問得意の諧謔でもあるが、一方では彼が飲酒に一種の特別な精神狀態を認めていることも窺える。「後飲酒」はより直接的に陶淵明の詩句表現や典故を踏襲しつつ、元好問が自己の飲酒觀を述べた作品であると言えるだろう。

六．元好問と陶淵明

元好問は失意の際に文學に沈潛する傾向がある。そしてその對象は過去の詩ないしは詩人であることが多い。二十八歳の落第直後は有名な「論詩絶句」三十首を作り、またその後も加筆が續けられた『錦機』を著している。[20]國史院辭職の直後の夏には『杜詩學』を著し、そして秋に「飲酒」五首と「後飲酒」五首を作っている。無論科擧受驗の爲の勉强から一時的に解放されて、文學創作ないしは文學研究に打ち込む時間が出來たからだとも言えるが、精神的打擊から目を逸らすかのように大作を執筆している。元好問にとって詩文とは心の拠り所であったのかも知れない。彼は經學や佛道二教などに關する著作は全く著さず、その關心は終始詩文の上にあった。汴京が陷落し聊城に軟禁されている間には『中州集』を編纂したが、本書は詩を以て史を存するという體裁をとっている。

そして過去の文學の中で、彼が他の詩人より明らかに高い關心を示したのが杜甫と蘇軾である。詩文の中でも兩者には何度も言及しており、その詩句を典故として使用したり詩の主題として取り上げたりしている。だがその他の詩人との決定的な違いは、杜甫については『杜詩學』一卷を、蘇軾については『東坡詩雅』三卷を著しているという點である。彼ら二人についてのみ、それぞれ詩文評の專著を著しているということが、その關心の高さを證明している。

無論研究者の間では、元好問が彼ら二人から强い影響を受けていることは常識とされている。そして杜甫・蘇軾と竝んで、陶淵明からも强い影響を受けていると見なされている。確かに彼の詩文においては陶淵明詩に由來する典故が多く見られるが、陶については杜甫・蘇軾のように專著を著していないのである。また先行研究では陶から

の影響を詳細に論じたものは未だ無く、管見の限りその全てが「論詩絶句」三十首の第四首における陶淵明評價についての研究である。つまり元好問が陶淵明に對して、他の詩人に比べて高い關心を示していたかどうかについて、論證がなされていない。この問題について今回取り上げた「飲酒」五首および「後飲酒」五首が多少の手がかりになると思われる。

國史院を辭職するという人生の轉換點において、元好問は陶淵明の「飲酒」に倣って二組の連作を作っている。この狀況において杜甫でもなく蘇軾でもなく陶詩に倣ったという點が、陶淵明への傾倒を表しているのではないか。「飲酒」五首のみならず、續いて「後飲酒」五首を作っており、偶然陶の「飲酒」を題材にして作ったというよりも、やはり意圖して陶詩を選んだと考えられるのである。

そして元好問は後年、人生の轉換點で陶詩に倣った大作を再度作っている。「九日讀書山にて陶詩の『露凄暄風息、氣清天曠明』を用いて韻と爲し十首を賦す」（卷二）である。本詩は五十一歳の作で、この年の前年の秋、元好問は二十年ぶりに故郷忻州へと戻ることが出來た。そしてその一年後、金朝の歴史資料を収集保存するべく、再び各地を巡ることになる。この詩はその資料収集の旅に出る直前に書かれたものである。[21] 詩は山水詩の側面もあり、また時に過去の回想を挾んで、自傳的要素も含んでいる。詩中に回想を含んで自傳的様相を呈する構造は、趙秉文「淵明の飲酒に和す」二十首と非常に似ているが、本作品では登山の時間軸（自宅～登山～山頂にて宴遊～別れ）と人生の時間軸（幼少時～青年時の交遊～仕官の頃）の二つの時間軸を有し、さらに複雑かつ緻密な構造となっている。[22]

青年時の挫折後、そして晩年の資料保存の旅の直前と、人生の轉機に二度も陶詩を踏襲した詩を作っているのは、決して偶然とは言い難い。陶淵明に對する高い關心を傍證するものと言えるのではないだろうか。

注

（1）『晋陽學刊』一九九四年第二期。
（2）『歸潛志』巻九、中華書局一九九七年版。
（3）『中州集』巻六「劉御史從益小傳」。
（4）『歸潛志』巻九に、劉從益が葉縣縣令であった元光元年（一二二三）に、元好問・李汾・李獻能・王鬱らと詩會を催したことが記されている。またこの年に元好問が葉縣を訪れていることは、「葉縣中岳廟記」という文を撰していることからも確認できる。
（5）元好問「故河南路課税所長官兼廉訪使楊公神道之碑」、『元好問全集』（増訂本）、巻二三。山西人民出版社、二〇〇四年版。以下、元好問の詩文は本書に拠る。
（6）『元好問全集』巻三四。この一文、『中州集』賈左丞益謙小傳にも同じものが収録されている。『中州集』では「遺笑、無窮」を「遺臭、無窮」に作り、前者では意味が通じがたい。ここでは後者に従って譯出した。
（7）高橋文治「元遺山と黨争」、『追手門學院大學文學部紀要』一六號、一九八二年。
（8）高橋氏前掲論文。ただし『歸潛志』等の資料を見る限りでは、唐における牛李の黨争や、北宋の新舊黨争とは全く異質のものである。政策論争や凄惨な權力闘争という側面は殆どなく、まさしく人間關係のもつれ程度にしか見えない。經義科と詞賦科の軋轢も絶對的なものではなく、例えば李純甫（經義出身）の門下から雷淵らの詞賦科及第者が輩出しているなど、必ずしも經義科と詞賦科が反目しあっていたわけではない。『宣宗實錄』の文體論争も、王・雷の周囲にそれぞれの賛同者の存在を裏付ける資料がなく、これを黨争と形容するには違和感がある。
（9）高橋氏前掲論文。
（10）文臣が集められた翰林院ではしばしば詩文を論じていた。これらのエピソードは『歸潛志』に幾つか収録されており、元好問にも言及している。また後年元好問はこの時期を振り返って、詩會を行ったことや詩文を論じたことを、旧懐の情とともに作品中で言及している。

(11) 貞祐初、秉文爲省試、得李獻能賦、雖格律稍疎、而詞藻頗麗、擢爲第一。舉人遂大喧噪、訴於臺省、以爲趙公大壞文格、且作詩謗之、久之方息。俄而獻能復中宏詞、入翰林、而秉文竟以是得罪（『金史』巻一一〇「趙秉文傳」）。『歸潛志』巻十にも同様の記事が見える。

(12) 蘇軾「和飲酒」二十首其の六に「牀頭有敗榼（敗榼：欠けた酒器）」とあり、「藤州江下夜起對月贈邵道士」に「牀頭有白酒」とある。また蘇轍にも「同王適賦雪」に「牀頭有酒未用沽」とあり、「病中郭尉見訪」に「應是床頭有新酒」とある。蘇軾の和陶詩を始めとしてこれらの詩句を下敷きにした表現。

(13) 『陶淵明集校箋』第二四八頁。

(14) 郝經「遺山先生墓銘」に「趙禮部見之、以爲少陵以來無此作也、以書招之。於是名震京師、目爲元才子。」とある。『陵川集』巻三五、四庫全書本。

(15) 「天壌間」という表現も李白がよく用いている表現である（「南都行」、「安州の裴長史に上（たてまつ）る書」など）。「飲酒」五首では李白から着想を得た詩句が多く見られる。「飲酒」という陶淵明を襲った詩題ではあるが、その根底に流れる孤獨感は李白により近い印象を與えている。

(16) 「飲酒」二十首、其の十。同前書第二三一頁。

(17) 僧惠遠居廬山、與劉遺民等結白蓮社、以書招淵明。淵明曰「若許飲卽往。」許之遂造焉、陶攢眉而去。（『錦繡萬花谷』前集巻七引『高僧傳』、『四庫全書』本）

(18) 趙秉文「和淵明飲酒」二十首其の二十に「淵明非嗜酒、愛此醉中眞。謂言忘憂物、中有太古淳。」とある。『閑閑老人滏水集』巻五、四部叢刊本。

(19) 江州刺史王弘欲識之、不能致也。潛嘗往廬山、弘令潛故人龐通之齎酒具於半道栗里要之、潛有脚疾、使一門生二兒轝籃輿、既至、欣然便共飲酌、俄頃弘至、亦無忤也。

(20) 興定元年（一二一七年、丁丑）の秋に省試に落第している。「錦機引」（巻三六）には「興定丁丑、閑居汜南、始集前人議論爲一編、以便觀覽。……十一月日河東元某自題」とあり「論詩絶句」三十首には「丁丑歲、三鄕作」と自注

がある。前年冬に長安に立ち寄り、本年は科擧の前から汴京に居て趙秉文との面識を得ているので、三郷には落第後に戻った可能性が高い。元好問は『錦機』編纂時に多くの書物に目を通し、その感想から「論詩絶句」を作ったのではないかと、狄寶心氏は推測している（『元好問年譜新編』第五二頁）。『錦機』は後年ずっと加筆し續けたようで、最晩年になってようやく劉秉忠に出版を託している（卷三九「答聡上人書」）。

(21) この年の十月二十日には旅の途中に詩を作っている（卷九「十月二十日雪中過石岭關」）。忻州から石岭關までの距離を考えれば、この「九日讀書山」詩を作った後ほどなくして出發しており、恐らくこの詩を作ったときには既に旅行の計画が胸中にあったであろう。

(22) 拙論「元好問『九日讀書山』詩について」（『藝文研究』第84號、二〇〇二年十二月）參照。